

# 法華經に現れた「一心」について

上 田 本 昌

一、

仏教では信行を厳しく教示していることは既に周知の如くである。即ち仏を信じ、その教説を修行して行くことが、成仏への条件とされている。その為に小乗仏教では数百の戒律が課せられ、大乘仏教の中でも数々の信行上に於ける規律が説示されている。<sup>5)</sup>

ところが日本の鎌倉新仏教各宗派では、そうした信行に関する諸条件を極度に縮小し、唱題の一行・称名の一念・一心の信行といった一心一念に重きが置かれ、末法の衆生救済の為の方法が、簡素化の一途を辿ることになっていったのである。

日蓮聖人にしても、末法に於ける下根下機の衆生の為に、法華經の題目を受持する唱題の一行の中に、あらゆる功德を収め、この一行を一心に修することによって、他の万戒の修行よりも勝れていることを教示している。

そこで問題となるのは、末法衆生の一心・一念である。「一心唱題」という場合、この一心にはどのような意味があるのか、これより「一心」について、特に法華經ではどのように教示されているのかを探ってみようとするものである。それにより、仏の示した一心によって、衆生が期する目的が達せられるからである。即ち法華經に説かれた

法華經に現れた「一心」について(上田)

「一心」の意義と特色を説明する視点を得ようとするものである。

二、

そこで先ず、「一心」の一般的な意味から調べて見ることにしよう。「心を一つにすること」つまり散漫な心をついに集中させ、一途のおもひにすることであると考えられる。即ち「心を専らにすること」であり、まとまりを持つことだといえよう。

(A)この一途・専心は、世間的な常識となっており、一心の意味として異論のないところであろう。一人の心が或る何物かに集中して行くことであるといえる。これに対して、

(B)多くの人が一致した心となつて行くことを指す場合もある。即ち「同心」となることで、志を一つにし、多数の者が共通の心となつていくことである。合力同心により難事を乗り越えることができるともいわれている如くである。

(C)次に心を乱さないこと、これは(A)と表裏の関係ということになるが、乱れた心を一つにまとめて行くことであると同時に、その一心を乱して散心にしなないことを意味する。つまり「一心不乱」のことであるが、これは実は仏教から出た言葉である。即ち阿弥陀経に「執持名号、一心不乱」とある如くである。

(D)もう一つ一心には、ほんのわずかな心、極めてかすかな心の動きという意味の一心一念という意味もある。これは主として聴法により一心の歓喜を得た時の功德を表す時に用いられている場合が多い。

また(A)の専心にしても(B)の同心にしても、共に仏教から源を発している語であるので、一応は世間的な用語として扱ってはみたが、究極は出世間的な用語として考えることができるわけである。

さて、爰では法華經に現れた一心に限ってその用例をいくつかあげてみることにしよう。それは法華經の中に、特に一心に関する記述が多く、教えを受ける相手に、強く一心が要求されているからである。即ち一心が法華經を受持し修行していく上で、如何に大事であるかを物語ってくれているからであるといえる。

序品では次の如く五例がある。

- (1) 「是諸大衆、得未曾有、歡喜合掌、一心觀仏。」<sup>③</sup>
- (2) 「又見菩薩、離諸戲笑、及癡眷屬、親近智者、一心除乱、撰念山林、億千萬歳、以求仏道。」<sup>③</sup>
- (3) 「是諸大衆得未曾有、歡喜合掌一心觀仏。」<sup>③</sup>
- (4) 「諸法実相義 已為汝等説 我今於中夜当入於涅槃 汝一心精進 当離於放逸」<sup>③</sup>
- (5) 「諸人今当知 合掌一心待 仏当雨法雨 充足求道者」<sup>④</sup>

右の中の(1)と(3)の「一心觀仏」については、既に『印度学仏教学研究』<sup>③</sup>の中でいささか論究してあるので、本論では省略することにするが、「一心に仏を觀る」ことから始まる法華の会座では、この「一心」に大きな意味のあることを、先ずもって認識しなくてはならない。

(2)の「一心除乱」であるが、これは心を一つにして乱れた念を除き去ることである。梵文ではこの部分に相当する所が、「起伏し動揺する心を抑えて、一心不乱に」<sup>⑤</sup>なることであるとしている。菩薩は智者に親近して一心除乱であると同時に、念を山林に撰めることが記されている。梵文では一心不乱と訳されているが共に菩薩たる者は一心、即ち起伏動揺の心を抑えて、乱れない状態を持つことが重視されている。

一心とは本来、二心三心に対する語であり、心を一つの対象に集中し、他の事象に移さないことであるといえる。

信仰の場合に於ても、一仏一經に心を集中させて一心になれば強い信仰となって行くが、二心三心となって心を散乱させると、それだけ弱い信仰心となって行くことになる。つまり本尊としていくつもの仏を信じ、数多くの經に散心することになると、一仏一經に心を集中するようなわけに行かなくなり、信仰の度合が薄いものとならざるを得なくなる。そこで純粹な信仰を貫く為には、一心除乱でなくては不可能となってくるのである。

仏は既に無量義經の説法品で「四十余年未<sup>①</sup>頭<sup>②</sup>真美<sup>③</sup>」と述べ、更に法師品では「我所説經典無量千万億、已説今説當説而於其中<sup>④</sup>、此法華經最為難信難解。」とあって「法華最第一」であり、「秘要之藏」であることを明らかにしている。従ってこうした經説から考えると、法華經以外の諸經に心を用いることは許されないことであり、法華經のみに一心不乱となることが、「以求<sup>⑤</sup>三<sup>⑥</sup>仏道<sup>⑦</sup>」ということになるといえる。

次に(4)の「一心精進」であるが、日月灯明仏は既に諸法実相の義を説き終ったので、「今、夜中において涅槃に入るが汝等は一心に精進して、放逸を離れるべきである」と訓誡している。心の乱れを除く為には、一心精進しなくてはならないし、放逸を離れることが要件となる。梵文では「教えに専念して、怠ることなく、また信心堅固であれ。」と訳されている。漢訳とほぼ同様であるが、一心精進に相当する部分は、教えに専念して怠ることのないようにと具体的に示し、更に信心堅固たることが付け加えられている。従って此の場合の一心は、教えに専念することを意味しているといえよう。心を専ら教えに向けて、一心になることだと考えられる。

次に(5)の「合掌一心待」であるが、これは序品の末文近くの一節であり、仏は法雨をふらして求道者を充足せしめるので、諸人は合掌して一心に待ちたてまつるべきであるというのである。「一心不乱、汝は合掌せよ。」と梵文では表示している。求道者に対し仏は大慈悲心を持って法雨を注ぐことに対し、諸人らは合掌して一心にその法説を待

つという敬虔な態度がとられるのは、当然のことながら求道者のとるべき基本の姿勢を示しているといえる。序品はこうして合掌一心待を指示して終り、いよいよ法華の会座に於ける序分を閉じ、正説の段階へ入って行くこととなる。

三、

方便品に入ると世尊の力・無所畏並にその法は、たとえ舍利弗や辟支仏・新発意の菩薩等であっても、一心に無量劫の間、仏の実智を思惟しようとしても、少分といえども知ることはできないものであるとしている。

「一心以妙智 於恒河沙劫 咸皆共思量 不能知仏智」<sup>④</sup>

即ち数多くの人等が一心になって永い期間に渡り、仏智を思量してもこれを理解することは不可能であるといふのである。仏智は仏のみ知り得るものであり、智慧第一の舍利弗でも知解することはできない。「以信得入」であり「非已智分」である。如何に一心になっても仏智だけは、「信」に依らなくては得入できないことを示したものと見える。しかし、右の部分は梵文では「無限のあいだ、かれらが一致して、余の勝れた教えの一部を願い求めても、その真の意義は分からないであろう。」<sup>⑤</sup>となっている。また「仏が見た教えを一致して心にかけて願ひ求めたとしても」と訳されていることから考え、ここでいう「一心」は、辟支仏や新発意の菩薩達の大勢が、心を一つにして「一致」共力しながら仏智を理解しようとしても、信の力がなくては不可能であるということを示そうとしているものといえる。故にまた

「不退諸菩薩 其数如恒沙 一心共思求 亦復不能知」<sup>⑥</sup>

とあり、新発意ばかりではなく不退の位に住した大菩薩であっても、一心に思求したのみでは知ることあたわずであっ

法華経に現れた「一心」について(上田)

て、

「舍利弗当知 諸仏語無異 於仏所説法」 当生大信力」

とある如く、「当生大信力」なくしては得られぬところである。したがって一心はむしろ一致してという意味の方が強いようにも考えられてくるのである。恒河沙の菩薩が一致しても仏智を得るには大信力がなくては到達できぬことを表した一偈といえよう。信を重視していることは法華の会座に限らず、仏の所説では信を根本としている点については既に論ずるまでもないが、特に法華の会座では如上の不退の菩薩であっても大信力を生ずべきことが指示されているのである。

かくして方便品では舍利弗が仏に向って、「願説第一法」と懇請するのであるが、その中に、

「是会無量衆 能敬信此法 仏已曾世世 教化如是等 皆一心合掌 欲聽受仏語」<sup>17</sup>

とあり、此の会座の大衆はよく此の法を敬信し、また一心に合掌して仏の語を聴受しようとしていることを述べている。即ち、仏の法を敬って信ずることは、一心に合掌するという態度で具体化されているのである。仏語の聴受に際し大衆のとるべき姿勢はこの「一心合掌」にあることを注目したい。

実は法華経の中で「一心」に関する語群では、この「一心合掌」が最も多く、続いて「一心同声」がこれに続き、次が「一心観仏」と「一心求仏道」がこれと同様に多く出てきている。こうした点から考えるに一心合掌は、信仰者にとって基本の態度であると同時に、また究極の姿勢であるともいえる。神仏に対して一心合掌することから宗教は始まり、互いに一心合掌し合うことにより仏国土が展開して行くことになるとしたならば、宗教にとって此の一心合掌は最も重要な態度であり、仏教にとっては成仏の為の唯一の姿勢として尊重されなくてはならない要件といえる。

この「皆一心合掌」に相当する梵文は、「かれらはすべて合掌して」<sup>(18)</sup>となっているので、法華の会座に付らなっている者は全員が、すべて合掌し仏の教えを信すべく来集していたことがわかる。舍利弗はこのあと一心合掌の大衆が、「是等聞此法」則生大歡喜」と述べているのである。聞法の大衆が大歡喜を生じたのは、まさに一心合掌から発していたことになるといえよう。

こうした舍利弗の言葉に対し、仏は開三顯一を説示し一仏乘の大事を開顯されるに至ったのであるが、更に又次の如く説いている。

「舍利弗汝等当一心信解、受持仏語諸仏如来言無虚妄、無有<sub>レ</sub>余乘<sub>二</sub>唯一<sub>一</sub>仏乘。」<sup>(19)</sup>

一心合掌という信伏随順の態度をとった上で、今度は一心に信解すべきことが仏より指示されている。合掌して信解するというのは、只管仏を信敬していることの表れであり、「受持仏語」の強調と共に「唯一仏乘」の開顯の意義を一層深いものにする為の定義付けとも考えられる。

方便品は迹門正宗分の中でも法説段に当るだけあって、信力に重きを置いた一心合掌の開法態度が明示され、それによって一心信解による大歡喜を得ると説き、一心になることが「自知当作<sub>レ</sub>仏」の直道であることを明確にしてゐるものといえよう。

#### 四、

次に譬喩品では仏が偈文の中で舍利弗に告ぐとし、

「汝諸人等 皆是吾子 我即是父(乃至)能一心聽<sub>二</sub>諸<sub>レ</sub>仏<sub>レ</sub>実法<sub>一</sub>。」<sup>(20)</sup>

法華經に現れた「一心」について(上田)

とある。仏が父徳をもって衆生を救済しようというのであり、その要件としてよく一心に諸仏の実法を聴けというのである。この「能一心聴」というのも、聞法の際の態度であることは言うまでもなからう。一心に聴けという諸仏の実法については、深智の者の為に説く教であるので、「汝舍利弗 尚於此經 以信得入 況余声聞」という隨順信解を主張している点では方便品の時と同様である。実法であり随自意なるが故に、信解しか体得の道がないのであって、その為には「一心聴」に徹することしか方法がないこととなる。

次に信解品では舍利弗の授記を見て歎喜した慧命・須菩提・迦葉・目犍連といった声聞衆が、座より立って、

「整衣服偏袒右肩、右膝著地一心合掌、曲躬恭敬瞻仰尊顏。」<sup>23</sup>

と仏に対する恭敬の姿勢が具体的に表現されている。この一心合掌は方便品の際と同様であるが、更に一段と衣服・身体の全てに渡っての記述となっている。ただ単に両の手を合せるのみではなく、全身をもって一心に仏を瞻仰する態度が現れているといえる。また、

「於仏教化菩薩阿耨多羅三藐三菩提上、不生一念好樂之心。我等今於仏前聞授声聞阿耨多羅三藐三菩提記、心甚歡喜得未曾有。」<sup>24</sup>

と「一念の好樂の心」が説かれているが、この一念は如上の一心とはいささか趣を異にしているのである。一般に一心と一念はほぼ同義の如くに考えられるのであるが、ここでは僅かな心、微細な念を一念と称していることになる。従ってこの場合の一念は、「一念信解」と同様に今までに取り扱ってきた一心と同列に見なすことはできないことがわかる。

次は葉草論品であるが、三草二木の譬論のあと偈文の中で、



「我為如来 両足之尊（乃至）世間之衆 及涅槃衆 諸天人衆 一心善聽 皆応到此 觀無上尊。」<sup>23</sup>  
この「一心善聽」は、前の「能一心聽」とほぼ同様の語であるが、次の「觀無上尊」と対句をなしていると考えられる。一心合掌と共に一心善聽は、聞法の時の要件であり、無上の尊を觀するための動作へと一連の関連性を持っていることがわかる。

この一心善聽と同義と考えられる語が、授記品の中に「諸比丘衆 今告汝等」皆當一心聽我所說<sup>24</sup>とある。ここでは仏が「皆一心になって我が所説を聴け」と指示している。仏弟子須菩提の當得作仏について語っている一段であるが、「皆當一心聽」は作仏という最も重要な所説の段だけに、特に会座の一同へ要求された態度であるといえよう。従って次の迦旃延の場合も、「諸比丘衆 皆一心聽 如我所說」真實無異<sup>25</sup>とあり、仏の所説は真實であって異りなきことを明らかにしている。「真實無異」なるが故に「皆一心聽」たることが要件となってくる。

更に「一心聽」に関連を持った經文は数多く見られるが、例えば隨喜功德品では、仏が阿逸多に向ってたとえ一人の為であっても法を聴かした場合は功徳を説く中で、

「何況一心聽説誦誦、而於大衆為人分別、如説修行。」<sup>26</sup>

とあり面貌円満にして見仏聞法を得ることが説かれている。ここでの「一心聽」は次の「説き誦誦し人の為に分別して説の如く修行」をするためのものといえる。即ち一心聽は自己の為のみではなく、他に向って「説く」為であることがわかる。説く為の前提として先ず善く聴き、その上で説くという化他行へと進むことになるのは当然のことながら、自分のみの一心聽であっては菩薩道に反することとなるのである。したがって法華經に於ける一心聽は、あくまで「説く」為の要件として菩薩に科せられた要件といえよう。故に又

「何況一心聴 解説其義趣 如説而修行 其福不可限。」

と結文で重説している。一心聴と解説の功德は無限であることを述べて此の品は終っているのである。これより先に涌出品に於ても、「所<sub>レ</sub>得第一法甚深回分別、如<sub>レ</sub>是今当<sub>レ</sub>説汝等一心聴。」とあり、第一の甚深の法を一心に聴くことを指示した上で、略開近顕遠に入っているのである。この一心聴も実は「説くため」のものであり、第一法を大衆に向って解説する為に、必要条件としてあげられていると考えることができよう。

## 五、

ところで化城論品では、一心合掌の他に「一心同声」の語がしばしば掲げられている。

「時諸梵天王即於<sub>レ</sub>仏前一心同声以<sub>レ</sub>偈頌曰」という経文が六回に渡って出てくる。梵文では「一緒に声をあわせ合せて合唱して、かの世尊に、これらのふさわしい詩頌で話しかけた。」<sup>28</sup>となっている。諸の梵天王が一緒に合せて合唱して、一心にふさわしい詩をもつて大通智勝仏を讃嘆している。この一心同声は会座に於ける数多くの梵天王らが、皆一同に仏を仰ぎ見つつ声を揃えて讃嘆しているのであり、複数の者が心を一にして仏に向い偈頌をもって「善哉見諸仏」又は「大聖転法輪」「世雄両足尊」といった言葉で始まる讃嘆となっているのである。梵天王さえもが一心同声であるのだから、衆生が仏に向う時は尚さらに一心同声でなくてはならないともいえよう。

一品の中に一心同声が六回も出てくるということは、それだけ一心同声に意義を持たせているものと考えられる。一緒に声をあわせて合唱するということは、会座の一同が一心になっていること、仏に帰依の念で統一されていることとの現れといえよう。これは一会の大衆が一心同声によって唱題することに共通するものといえる。この品の場合は

仏を讃嘆する為の一心同声であるが、すべからく仏の音声を聞く時も、法を求める際も、前述の如く一心合掌・礼拝・善聴・同声でなくてはならないことは明白であり、従ってまた唱題に際しても一心同声たるべきことが重要な要件として考えられよう。

尚、同品の中では大悲と名付けられた一人の大梵天王が、諸の梵衆に向って、「未曾見此相、当共一心求」と語っている。これは光明照耀の未曾有なる宮殿を見て、大衆が歓喜し苦の衆生を度脱する為の教えを一心に求めようと呼びかけているものである。この「当共一心求」は先の「一心同声」と関連してみると、声を揃えて仏を讃嘆しつつ大衆が一心となって教法を求めることは、一連の聴聞求道の態度として、切り離して考えることのできないものといえよう。

かくして同品では次に、仏自身が一心に一処に坐して禪定に入ったことを説いている。

「説是法華經 如恒河沙一偈 彼仏説經已 靜室入禪定 一心一処坐 八万四千劫。」<sup>33</sup>

従来は専ら教化される衆生の側についての一心が説かれており、成仏の為の第一歩として合掌・礼拝で始まる求道聞法の態度が随所で示されてきたのだが、爰では明らかに仏の一心が述べられているのである。大通智勝仏が十六王子に向って法華経を説いたあと、八万四千劫に渡って一心に一処に靜室入禪定をとげているのである。沙弥となった十六王子は、大通智勝仏が禪から出でたまわぬことを知り、各々仏に代って法座に昇り法を説くに至ったのである。つまり仏の「一心一処坐」は十六人に仏道を具足させ、正覚を成じさせる為であった。この聞法者は「在在諸仏土、常与師俱生、」を得ると説いている。この「靜室入禪定、一心一処坐」に相当する梵文では、「僧院に入って瞑想に専念した。」<sup>34</sup>となっている。一心専念に瞑想の境地に入る仏は既に法を説き終っており、その後継者達に説法をゆだ

法華經に現れた「一心」について(上田)

ねていることになる。

仏もまた法を説き終った後は、一心専念に禪定の境に入って行くというのであるから、生仏俱に一心たることが仏道を歩む上で不可欠の要件ということができよう。「一心一処坐」は仏のみのことではなく、衆生が聞法・礼拝・合掌の際の極めて自然な姿であるといえる。「皆俱に一心に一処に坐して」という一會の在り方から聞法も唱題も始まって行くことになるのであるから、信行上の基本態度を示したものといえよう。

信行態度といえは常に怠らず持続すべきことが大事な要件となるが、法華經の中では次に多く使用されている語に、「一心精進」がある。例えば涌出品には、

(A)「阿逸多乃能問<sub>レ</sub>仏如<sub>レ</sub>是大事<sub>二</sub>、汝等当<sub>レ</sub>共一心被<sub>レ</sub>精進鎧<sub>二</sub>発<sub>レ</sub>堅固意<sub>上</sub>」<sup>1)</sup>

(B)「当<sub>レ</sub>精進一心<sub>二</sub>我欲<sub>レ</sub>説<sub>レ</sub>此事<sub>一</sub>勿<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>疑悔<sub>二</sub>仏智<sub>レ</sub>思議<sub>一</sub>。」

(C)「亦常樂<sub>レ</sub>於諸仏之法<sub>二</sub>一心精進求<sub>レ</sub>無上慧<sub>一</sub>。」

と三箇所に渡って一心に精進すべきことが強調されている。(A)の一心精進は釈迦仏が弥勒菩薩に対して述べられた言葉で、梵文では「心を專一にして、確固たる信念を持て。」<sup>2)</sup>とあり、(B)は(A)に続く偈文であって、梵文では「心を統一して、安住せよ」<sup>3)</sup>となっている。仏が大事を説くに当って、皆共に一心に精進の鎧を着けよと言ひ、堅固の意を持つべきことを命じ、精進して心一つにすべきことが重ねて説かれている点を、特に注目すべきであろう。言うまでもなく「精進」は、六度の一であり、菩薩の修行すべき掟の一つであるが、他の布施、受戒、忍辱、禪定、智慧についても、同様に一心でなくてはならないが、特にここでは一心精進に重きが置かれていることは、心を堅固に持つことと、疑悔を生じないこと、更に無上慧を求める為には、精進努力が最も大事な要件となるからであろうと考えられ

る。六度に関しては分別功德品に、

「復有<sub>レ</sub>人能持<sub>レ</sub>是經<sub>二</sub>兼行<sub>一</sub>布施持戒忍辱精進一心智慧<sub>一</sub>、其德最勝無量無<sub>レ</sub>刃。」<sup>59</sup>

と受持に兼行六度が説かれているが、ここでは一心智慧に重きがあり、「為<sub>レ</sub>他人説」が重要な意義を持っているので、他人に解説する為には必然的に一心智慧が要求されてこよう。この品では著名な「五十展転」が説かれているが、一人の為に法を聴かしたただけでも、その功德は多大であると、「何況<sub>レ</sub>一心聽説誦誦而於<sub>レ</sub>大衆<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>人分別如<sub>レ</sub>説修行。」とあり、一心に聴法し、解説し、誦誦すること、即ち如説修行の功德が示されている品であるから、一心に聴きまた説くことに主眼が置かれているのは当然であるといえる。一心に精進し、智慧を磨き、かつその上で一心に解説し誦誦することが述べられていることは、法華經を弘める立場の者にとって特に注目留意すべき点であるといえよう。

## 六、

さて、湧出品では、「我今説<sub>レ</sub>実語<sub>二</sub>汝等<sub>一</sub>一心信、我從<sub>レ</sub>久遠<sub>二</sub>來教<sub>一</sub>化是等衆。」<sup>60</sup>と略して久遠を説くが、その際「一心に信ぜよ」と特に一心信たることを示している。未聞のことであるので、久遠実成は「一心に信ずること」から始まるといえる。総じて宗教では「信」を重視するが、とりわけ法華經では、専ら信を第一に据えている。信じて仏を見たてまつることから総ての宗教活動が開始されて行くのである。

故に寿命品へ入って久遠実成が示されるや「一心欲<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>仏、不自惜<sub>レ</sub>身命<sub>二</sub>」<sup>61</sup>とあり、一心に仏を見たてまつるべく、わが身命をも惜しまないという徹底した「見<sub>レ</sub>仏」の信行へと進んでくるのである。尚、「見<sub>レ</sub>仏」と「觀<sub>レ</sub>仏」につい

法華經に現れた「一心」について（上田）

では、既に少しく触れているのでここでは省略するが、「一心に仏を見るということとは信仰者にとって最も基本の態度であると同時に、帰結でもあるといえよう。見仏に始まって見仏に至り着く、その間には如上の一心合掌や一心受持を始めとするさまざまの一心が必要となり、各自の分に応じた一心の修行と化他の為の五種法師や六度が、考えられなくてはならないのである。

日蓮聖人が目標とされた不輕菩薩が、常に一心に礼拝行を積まれたことも、相手の中に仏を見たからである。不輕品の結文には、

「応当一心 広説此經 世世値仏 疾成仏道」。

とある。「まさに一心に広く此經を説くべし」と仏は布教を命じている。一心になって広説此經することが、仏道を成ずる為の条件であるともいえる。自分の中に仏を見、相手の中にも仏身を見ることが出来る法華經を、広く説くことにより、自他共に仏を見て、仏道を成就することを得るというのである。

日蓮聖人はこの「一心欲見仏、不自惜身命」の經文によって仏道を成ずることができることを実証されているといえる。「義淨房御書」には、「日蓮が己心の仏界を此文に依て顕す也。」と述べ更に「心を一にして仏を見る。一心を見れば仏也。」とも言っている。観念的に仏を見るのではなく、事実として現に仏を見ていくことにより、唯仏与仏の世界が展開されてくるのである。理観から事観への見仏の中に、「妙覺<sup>ハ</sup>積尊<sup>ハ</sup>我等<sup>ハ</sup>血肉也、因果<sup>ハ</sup>功德非<sup>ハ</sup>骨肉<sup>ニ</sup>乎<sup>カ</sup>」<sup>11</sup>という『本尊抄』の如き「所化以同体」の境地を得ることが可能となるのである。

神力品では仏が、「汝等於如来滅後<sup>ニ</sup>応当<sup>ニ</sup>一心受持誦誦解說書写如說修行上<sup>ニ</sup>」と一心受持の五種法師を説き、法師品と同様の如說修行が見える。神力別付の立場からして当然ともいえるが、次の属累品では、「汝当<sup>ニ</sup>応当<sup>ニ</sup>一心流<sup>ニ</sup>

布此法広令増益上。」とあって一心流布が説かれている。この「一心流布」は弘通しようとする者にとっては、本化・迹化の別なく最も重要視しなくてはならない経文であり、仏使の使命として日蓮聖人も受領されている。法華經の行者は常に志念堅固にして、「一心不懈怠」でなくてはならないと分別功德品に示されている如くで、一心とは仏を念じ心が安住して乱れていない状態である。「安住心不乱」を指すものといえる。又同品では仏の所説を聞いて一心一念でもこれを信ずる者の功徳を示し、更に深心に信ずる者の福は無量であることを説いている。ここではほんのわずかな一心一念の意であるが、しかし遂いには深心に至り心を一つにしての信をもって福の無量を説く上からすると、浅い一心一念から深い一心へと段階を示していることになるであろう。

かくして法華經では序品の「一心観仏」から始まり、寿量品の「一心欲見仏」に至り、更に神力品の「一心受持」、属累品の「一心流布」に至るまで、その間の諸品では専ら「一心」に関する説示が盛んであって、心を一つにすることの重要性がしばしば重説されている。これは信受し受持し流布させる上からも、常に「一心」でなくてはならないことを強調された為であるといえる。「心に二ましまして、信心だに弱く候はだ、峯の石の谷へころび、空の雨の大地へ落ると思食せ。」ということになり、二心三心の散心弱信であってはならないのであり、一心合掌の態度をそのまま一心受持の強信へと持続しなくてはならない。

「一心欲見仏不自惜身命」は、純粹な宗教の立場であり、日蓮聖人は此の経文によって仏果を得ることが可能となるというのであるから、「一心」はまさに成仏への鍵であるといえよう。尚、法華經の中にはここで取り上げた一心の他にも「一心称名」「一心供養」「一心自書」等の語が散見できるが、主要なものに留めた。日蓮聖人の教学上で最も重要なことは言うまでもなく唱題であるが、これも法華經所説の「一心」に従って、「一心唱題」でなくてはな

法華經に現れた「一心」について(上田)

らないことが、如上の所見に依り首肯できるであろう。

(註)

- (1) 波羅提木叉では比丘二五〇戒、比丘尼は三五〇戒ほどの条文がある。僧伽の統制であり具足戒という。大乘でも十善戒を始め四十八輕垢戒(梵網經)等が説かれている。
- (2) 阿弥陀經(大正蔵十二一三四七)
- (3) 法華經(大正蔵九一四)
- (4) 同(同 九一三)
- (5) 同(同 九一二)
- (6) 同(同 九一五)
- (7) 同(同 九一五)
- (8) 『印度学仏教学研究』第四十卷第一号二五八頁「一心觀仏」を参照されたい。(平成三年十二月刊)
- (9) 岩波版『法華經』岩本裕訳 上―三三
- (10) 無量義經(大正蔵九一三八六)
- (11) 法華經(大正蔵九一三一)
- (12) 岩波版『法華經』(上―五九)
- (13) 同(上―六五)
- (14) 法華經(大正蔵九一六)
- (15) 岩波版『法華經』(大正蔵九一七三)
- (16) 法華經(大正蔵九一六)
- (17) 同(同 九一六〇七)
- (18) 岩波版『法華經』(上―八五)



- (19) 法華經 (大正蔵九一七)
- (20) 同 (同 九一五)
- (21) 同 (同 九一六)
- (22) 同 (同 九一六)
- (23) 同 (同 九二〇)
- (24) 同 (同 九二二)
- (25) 同 (同 九四七)
- (26) 同 (同 九四一)
- (27) 同 (同 九一三)
- (28) 岩波版『法華經』(中一三三)
- (29) 法華經 (大正蔵九二六)
- (30) 岩波版『法華經』(中一八三)
- (31) 法華經 (大正蔵九四一)
- (32) 岩波版『法華經』(中一三〇七)
- (33) 同 (中一三〇七)
- (34) 法華經 (大正蔵九四五)
- (35) 同 (同 九四一)
- (36) 同 (同 九四三)
- (37) 『印度学仏教学研究』第四十卷第一号二六四頁。
- (38) 法華經 (大正蔵九一五)
- (39) 義浄房御書 定遺七三〇
- (40) 観心本尊抄 定遺七一
- (41) 同 同 七二

法華經に現れた「一心」について(上田)

法華經に現れた「一心」について(上田)

(42) 法華經(大正蔵九一五二)

(43) 同(同 九一五二)

(44) 撰時抄の中で「法華經をひろむる者は日本の一切衆生の父母なり」(定遺一〇一八)と述べ、更に「日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり。」と述べている。また四条金吾殿御返事には「能説此經、能持此經の人、則如来の使なり。」(定遺一六六八)ともある。